大学内に都城市教育支援センター“青空ラボ”の設置
－不登校児童生徒の居場所づくり－

南九州大学 人間発達学部長　宮　内　　孝

はじめに

不登校の問題は、解決しなければならない喫緊の課題の一つです。文部科学省によると、不登校児童生徒数は 10 年連続で増加し、過去最多となっています（2024 年）。宮崎県都城市にとっても、この不登校の問題は大きな教育的な課題の一つでした。この課題解決に都城市と南九州大学が協働で取り組むことになりました。それが、都城市教育支援センター青空ラボです。南九州大学都城キャンパス内にこの青空ラボを設置し、2023年11月から試行的な取組みを行い、2024 年 4 月に本格的スタートをしました。

本稿では、この青空ラボの概要や学生による支援を紹介しながら、大学における不登校児童生徒の居場所づくりの可能性について述べます。

１．青空ラボ設置の背景

(1) 背景１「都城市との公私協力方式によるキャンパス開校」

南九州大学は、都城市との公私協力方式によって2009年4月に都城キャンパスを開校しました。それ以降、都城市とは様々な連携活動に取り組んできました。その取組みの積み重ねによって醸成された都城市との信頼関係が、青空ラボのキャンパス内設置につながったと感じています。

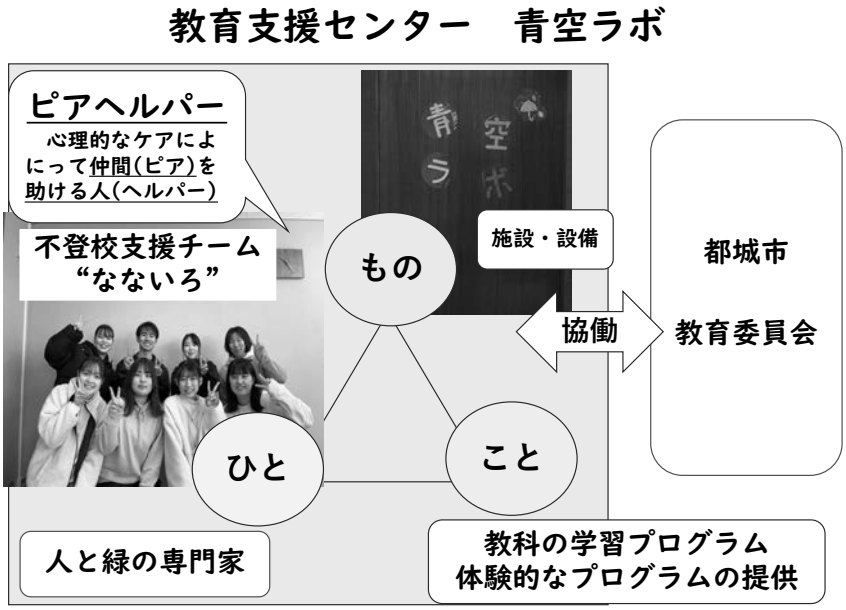
本キャンパスは、「みどり」をテーマとした環境園芸学部環境園芸学科と「ひと」をテーマとした人間発達学部子ども教育学科の 2 学部 2 学科で構成しています。青空ラボは、子ども教育学科の学生から構成された不登校支援チーム“なないろ”が、その運営にかかわっています。この“なないろ”は、保育士や幼稚園、小学校、特別支援学校の教員を目指している学生で構成しています。

さて、不登校児童生徒への支援の充実は、都城市にとっても大きな課題でした。その課題解決の一つとして、学校に行きづらいとか、行きたくても行けない子どもたちが社会との接点を

持ちながら安心して過ごせる居場所として、青空ラボを本キャンパスに設置しました。本キャンパスには、青空ラボに提供できる部屋や体育館などの施設設備といった「もの」がありました。保育学・教育学、さらには農学、園芸学などの専門家である教員とそれを学んでいる学生といった人材である「ひと」が豊富に備わっていました。このような本学の「もの」や「ひと」すなわち強みと専門性を活用した教科の学習、創作活動、スポーツ活動、栽培活動などの体験活動といった「こと」を多様に青空ラボに提供できる可能性が、本キャンパスにはありました。

そこで、青空ラボの実質的な運営は都城市教育委員会が、「もの」「ひと」「こと」の提供は本学がと役割分担を明確にした協働体制によって、子どもの新しい居場所づくりに取り組むことにしました（図 1）。

（図 1）青空ラボ



(2) 背景 2「“協働”と“往還”の教育システム」

子ども教育学科の特徴的な教育システムの一つが、“協働”と“往還”による深い学び、質の高い実践力の育成です。大学ができる教育はその責任を果たし、できないことは保育園（所）・幼稚園、小学校はもちろん地域の様々な方々に指導をお願いするといった大学と地域とが協働で学生教育に取り組んでいます。また、学生は、大学と地域を行ったり来たりする往還を通して、大学の座学で得る科学知と地域の実践で得る実践知を融合させた高次元の実践力を備えた“せんせい”を養成する取組みをしています。

青空ラボには、この“協働”と“往還”による学びの場としての機能が潜在しています。すなわち、大学と都城市教育委員会とが協働で、青空ラボにおいて活動する学生の教育を行う。大学と青空ラボを往還する学生は、不登校児童生徒の適切なかかわり方の理解とその実践力はもちろん、コミュニケーション能力、社会性の向上が期待できます。

(3) 背景 3「ナナメプロジェクト」

子ども教育学科は、ナナメプロジェクトに昨年度から取り組んでいます。子どもにとっての先生や親はタテの関係、兄弟姉妹や同級生はヨコの関係、そして年上の学生はナナメの関係となります。ナナメの関係にある学生が、子どもにかかわりなから地域課題の解決に取り組む活動がナナメプロジェクトです。例えば、学力格差の解消を意図した学習会、保育士・教員不足の解消を意図した高校生のための子どもにかかわるボランティア講座などがこの取組みです。このプロジェクトの取組みのひとつとして、中学校での別室登校生徒への支援を行ってきました。この実績が、青空ラボの設置につながりました。

2．青空ラボとは

(1) 青空ラボの運営の概要

青空ラボの運営概要は、以下のとおりです。

■ **設置の目的**

学校に行きづらいとか、行きたくても行けない子どもたちが社会との接点を持ちながら安心して過ごせる居場所づくりを目的としています。「青空ラボ」は、“なないろ”のメンバーが命名しました。「青空」には、一人ひとりがそれぞれに合った様々な場所で輝けるように、「ラボ」には自分の興味・関心があることを、自分らしく学ぶという思いやメッセージが込められています。

■ **開級日**　毎週月・水・金曜日の 9 時 30 分から 11 時 30 分

■ **開級場所**　都城キャンパス　ひばり館の 2 階

■ **都城市のスタッフ**　教育委員会の教育相談員、スクールソーシャルワーカー等

■ **南九州大学のスタッフ**　不登校支援チーム“なないろ”の学生とサポートスタッフ

■ **支援方針**

ア　やりたいことを大切にした多様な学び
　　体験的な学習・自主学習を自ら選択する主体的な学びをとおして

イ　緩やかなフレームで多様な他者との学び
　　学校スタイル・時間割等にとらわれない異学年での学びをとおして

ウ　年齢の近い南九州大学生の支援による学び
　　社会性の向上や自立に向けた学びを大学生との関わりをとおして

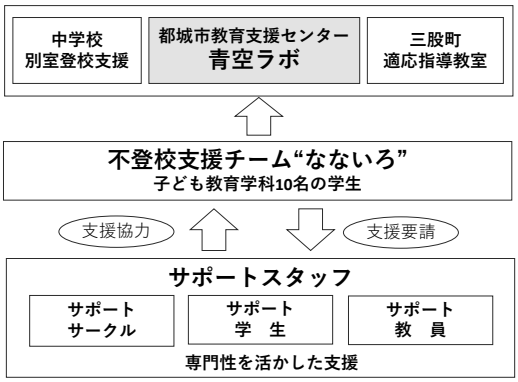
■ **学生による支援プログラム**

児童生徒と都城市のスタッフや“なないろ”の学生との協議によって、学習や体験活動などの活動プログラムを決定

(2) 青空ラボの支援チーム

青空ラボの支援チームは、**図 2** に示すように、不登校支援チーム“なないろ”とサポート学生、サポートサークル、サポート教員のサポートスタッフで構成しています。“なないろ”は、保育学・教育学を学ぶ子ども教育学科の 2、3、4 年生 10 名で構成しており、中学校の別室登校支援や三股町適応指導教室支援にも取り組んでいます。この学生の多くは、ピアヘルパーの資格（注）を有しており、心理的なサポートも可能にしています。

（図 2）青空ラボの支援チーム



▲ 不登校支援チーム“なないろ”

サポート学生は、56 名で組織されています。これらの学生は、“なないろ”による不登校児童生徒への支援者募集の公募にエントリーした学生です。この学生たちは、氏名だけではなく例えばピアノが教えられる、サッカーが教えられるなどといった特技、支援できる曜日とその時間帯を Google フォームに登録し、それを“なないろ”の学生がリスト化しています。例えば、ピアノ体験プログラムの時には、ピアノを特技としている学生をそのリストから選んで支援依頼をするなど、計画した活動プログラムにふさわしい人材をこのリストから選んでいます。

また、バドミントンサークル、ボードゲームサークルなどの学生サークルで構成するサポートサークルや本学教員で構成するサポート教員にも、その専門性を考慮してサポート学生と同様の支援依頼を行います。

(3) 青空ラボの活動プログラム設定の方法

児童生徒と都城市のスタッフと“なないろ”の学生とで、月に 1 回以上の打ち合わせを設けて、活動プログラムの内容について協議をします。当日の朝は、児童生徒の希望を聞き取りながら、今いるスタッフだけで対応可能か、教材教具が準備できるか、活動場所が確保できるかといった視点で話し合いを行い、その視点がクリアできれば、その活動プログラムを実行します。

実行が難しい活動プログラムの場合は、継続的に準備に取り組んで、後日にそのプログラムを実施します。体育館使用が可能である毎週金曜日は、運動・スポーツを活動プログラムとしています。

（注）「ピアヘルパー」は、当大学で取得できる日本教育カウンセラー協会認定の資格です。「Peer」は「仲間」、「Helper」は「助ける人」を指し、この資格を持つ学生は、カウンセリングや関連する心理学の理論と方法について学び、教育・福祉・保育などの実際の場面で人とかかわるために必要な基本的な力を身につけています。

3．青空ラボでの支援例

(1) 不登校支援チーム“なないろ”による支援

“なないろ”の学生は、児童生徒の思いや願いを最大限に組み込んだ活動プログラムづくりに取り組んでいます。学力保障を図る学習支援、コミュニケーション能力を高めるトランプなどのゲーム活動、体力向上、社会性を培う運動・スポーツプログラムがその一例です。

このような児童生徒とナナメの関係にある学生との交流は、とても温かで肯定的です。そのようなかかわりが、青空ラボは自分を受け入れてくれる人がいる居場所、安心して過ごせる居場所として、通級する児童生徒が認知するきっかけとなっているようです。また、児童生徒の価値観を多様化させるとともに「私も、大学生みたいになりたい」といったロールモデルとなりキャリア支援の一助となることも期待しています。サポートしている学生にとっては、大学での学びを深めつつ、社会性を向上させるよい機会となっています。

(2) サポート学生による支援

運動・スポーツプログラムでは、取り上げるスポーツが得意な学生をサポートスタッフのリストから選出して、その支援依頼を“なないろ”の学生が行います。サッカープログラムでは、支援依頼を受けたサッカー経験のある学生が、体育館にてサッカーの技術指導を行いました。また、ピアノプログラムでは、支援依頼を受けた学生が、音楽室でのピアノレッスンを実施しました。自分の特技を活かした支援によって喜んでいる児童生徒の姿に触れることは、支援学生の自己存在感を強く感じる機会ともなっています。

(3) サポートサークルによる支援

“なないろ“の学生と児童生徒との話合いにおいて、ボードゲームプログラムに取り組むことになりました。そこで、“なないろ“の学生から、ボードゲームサークルへの支援依頼を行いました。当日は、ボードゲームサークルの学生が講師として、ゲームの準備や指導を行いました。普段は自分たちが楽しむために取り組んでいるサークル活動が、他人を楽しませることに寄与できる喜びや自分たちの活動が披露できる喜びを、サポートサークルの学生は味わっています。

(4) サポート教員による支援

運動・スポーツプログラムとして、子ども教育学科が開講している体育の授業に、児童生徒は参加しました。この日の授業の目的は、運動を通した仲間づくりを内容とした「体ほぐし運動」でした。児童生徒は、学生と一緒に運動に取り組みながら学生との交流を楽しんでいました。学生は、児童生徒を温かく受け入れ、児童生徒とともに運動に取り組んでいました。

また、社会福祉施設にポケットオルゴールのプレゼント活動をしている教員の指導で、オルゴールづくりに学生とともに取り組みました。制作活動を通して、モノづくりの楽しさを味わっていたようです。

(5) 学部間連携による支援

青空ラボの児童生徒やスタッフ全員で野菜栽培に取り組んでいます。畝づくりから、栽培、収穫、そして調理・会食といった食育プログラムです。環境園芸学部の園芸育種学研究室の教員に、支援依頼を行いました。畝づくりと野菜の苗植えは、当該研究室の大学院生の指導で、その作業に取り組みました。それからは、青空ラボへの通級の度に児童生徒は畑に通い、草取り、水やりなどの世話に取り組んでいます。植物の成長を実感する喜びを味わうとともに、会食までの一連のプログラムを楽しみにすることが、通級への動機づけとなることを期待しています。

▲ 野菜栽培

4．今後の青空ラボの展望

青空ラボに通級する児童生徒に何を提供したら、本人たちの成長や学校復帰に役立つのかを常に考えながら、“なないろ”の学生は支援に取り組んでいます。また、様々な専門性をもつ人材が集まっているサポートスタッフによって、多種多様な体験活動の提供を可能にしています。さらには、大学の充実した施設や設備が、その実行を支えています。このような活動によって、支援をされる児童生徒ばかりではなく、支援をしている学生も成長をしていることは間違いありません。

このように、大学にある高度な人的・物的資源を有効活用した居場所づくりは、不登校児童生徒にとって安心できる居場所、多様な学びができる居場所となるとともに、学生教育の貴重な場となる可能性を強く感じています。

今後は、青空ラボの営みの効果を検証していきます。その検証をもとに、都城市教育委員会と協働で青空ラボの運営の充実に努めます。さらには、保護者支援や保護者のコミュニティづくりについての検討を行いながら、不登校児童生徒の保護者も含めた新しい居場所づくりも模索していきます。

都城市教育支援センター青空ラボは、不登校児童生徒の居場所、そして学びの新しいプラットフォームとして、大きな期待が寄せられています。子ども教育学科は、この取組みを通して地域社会への貢献を強化するとともに、未来のリーダーたちを育てていきます。